

Northanger Abbey

——“disguise”に隠された動機——

真 下 美 和

I

Northanger Abbey の女主人公 Catherine Morland は、周囲の人たちの行動の動機を、想像力を駆使して彼女流に解釈してしまう。誰よりも“good-nature” (133) の持ち主で世間知らずの Catherine は、彼らの隠された動機には全く気づきもしない。それどころか、Catherine には、表面に表われている動機以外に、また別に隠された真の動機があるということ自体、思いもよらないことなのである。このことは、Catherine に語る Henry Tilney の次のような皮肉が証明している。“How very little trouble it can give you to understand the motive of other people’s actions.” (132) Catherine は、人を年齢や立場などから総合的に判断せず自分を基準にして判断してしまうので、自分と同じような性質の人の動機は理解できるのだが、自分と異なる性質の人を正しく判断することはできない。Henry は、そういったことを理解しているので、他人の行動の動機が Catherine に何の苦もなく理解できるとは全然思っていないのである。Henry の言葉の真意は、他人の行動の真の動機を理解することほど難しいものはないということを Catherine に指摘することである。

世間知らずの Catherine は、人のよさを Henry にたびたびからかわれるのだが、小説の後半になると、他人の行動や言葉に隠されていた真の動機を知るようになる。Catherine は、Isabella Thorpe に裏切られたことを知り、“I never was so deceived in any one’s character in my life before.” (206) と言って悔やむ。Catherine は、裏切られて初めて Isabella の“fickleness” (130) や “inconstancy” (130) に気づく。

また、Catherine は、General Tilney の隠された動機 の存在にも気づかなかった。彼は常々、彼女に“The money is nothing, it is not an object, but employment is the thing.” (176) と言っていたので、Catherine は、

Austen の言ういわゆる彼の“grand idea” (119) を真に受け、General Tilney を次のように理解していた。“Your father [the General] is so very liberal! He told me the other day, that he only valued money as it allowed him to promote the happiness of his children.” (205) Catherine は、彼の金銭にまつわる隠された動機を見抜けず、ゴシック小説さながらに屋敷から追い出されて初めて、General Tilney が何よりも重んじているのはお金と地位であることを知ることになる。

Isabella や General Tilney の隠された真の動機は、彼らの行動に表われていないはずはないのだが、Catherine にはそれが見えていなかったということである。つまり、ゴシック小説に夢中になってしまった Catherine には、現実の世界と想像の世界の区別がつかなくなってしまっていて、現実を正確に認識することができなかったのである。Catherine は、裏切られ失望させられて初めて、人の行動には隠された動機があるということを知ったのだ。人の行動には隠された動機があり、自分の利益のためには自分を偽ることがある。Catherine は、率直で正直な Tilney 兄妹や虚栄心が強く野心的な Thorpe 兄妹と交際する中で、このことを身を持って知り、人の隠された真の動機を見抜く力を確実に身につけていく。

Tilney 兄妹は Catherine の精神的成長に大いに貢献する人物として設定されているが、中でも特に Henry Tilney は、“a true hero who actually exists in common life” (Mansell 37) であり、作者 Jane Austen の代弁者であると考えられ、彼は、ゴシック小説に夢中になっているがゆえに現実の世界が見えてない Catherine を、悪意のない皮肉でからかう役割と、現実の世界が見えるように教え導くという mentor の役割の両方を作者から託されている。それゆえ、その両方の役割をこなす Henry の語る言葉は、皮肉なのか文字通りのものなのか、彼の真意が一体どこにあるのかわれわれ読者には分かりにくくなるときがある。その点を Dar-

rel Mansell は, “He [Henry] seems to be a strategic error Jane Austen never repeats.” (36) と述べてさえいる。このような Henry Tilney であるが, もちろん彼の皮肉にも, 隠された動機があるにちがいない。彼の “ironic disguise” (Mansell 37) には何が隠されているのだろうか。“disguise” とは, 現実の世界とどのような関係をもつのであろうか。

II

われわれ読者には, Catherine がバースで知り合った Isabella が, 出会った最初から, その言動から Catherine の友としてふさわしい人物ではないということが予想できる。一方, 同じくバースで出会った Eleanor Tilney と Catherine との関係は, “simplicity” (72) “truth” (72) “without personal conceit” (72) という言葉が使われており, Isabella と Catherine との関係とは対照的に描かれる。Isabella ほど, 表の感情と真の感情がかけ離れ, “disguise” をしている登場人物はいない。

Isabella には次の3つのこと, flirtation, 財産, ファッションにしか関心がない。特に flirtation と財産に関係することが話題にのぼると, Isabella は虚栄心と野心を隠し, それらの話題にはまるで関心がないかのようなふりをする。しかし, 彼女の隠された虚栄心や野心は, 外に出てしまう。Catherine は気づいていないが (何かがおかしいとは思っているようだが), Isabella の言動や手紙にも, “inconsistencies” (218) や “contradictions” (218), “falsehood” (218) が表わっていて, われわれ読者にはそういった Isabella のほころびがいやでも目につく。例えば, Isabella は, 自分の気持ちが婚約者 James Morland から離れて, Captain Tilney の方へ向けられつつあるのを告白しているのも同然な発言をするが, それは Catherine との次のようなやり取りのなかでも明らかになってくる。Catherine は, 知らないうちに Isabella の兄 John Thorpe から求婚されていたことを後で知って, Isabella に次のように言う。

“... if I could think of one man more than another — he [John] is not the person. . . you must not be angry with me. I cannot suppose your brother cares so very much about me. And, you know, we shall still be sisters.” (145)

Catherine は, 兄 James に対する Isabella の愛情を確信していたので, 将来は Isabella と姉妹になるのは当然だと考えている。だから, John と結ばれなくても, いずれは Isabella と姉妹になるという考えが念頭にある。このように考える Catherine に対して, Isabella は, “Yes, yes,” (with a blush) “there are more ways than one of our being sisters. . .” (145) と答える。この彼女の発言をわれわれ読者も Catherine 同様, 素直に受け止めて, Isabella が James との結婚を念頭において返事をしていると思いたい。しかしこの時点になると, Isabella は, James に自分が期待していた程の財産が譲渡されないということを知って, “a grave face” (135) をして元気がなくなっている。そこへ, Henry の兄で “one of the finest old places in England” (143) である Northanger Abbey の跡継ぎ Captain Tilney が現われる。彼は, Isabella が James と婚約していることを知りながら, 自分の虚栄心を満たすためだけに, 彼女に近づく。James から心が離れつつある Isabella の方もまんざらではない様子で Captain Tilney に近づいていく。このような状況にあるわけだから, 上記の Isabella の Catherine に対する返事は, 彼女が Captain Tilney と結ばれ, Catherine と Henry が結ばれた場合を思い描いてのことなのである。つまり, 虚栄心が強く野心家の Isabella でさえも, 頬を赤く染めなければ言えないようなことを, 内心考えているのである。“What one means one day, you know, one may not mean the next. Circumstances change, opinions alter.” (146) これは, Isabella 自身が述べている言葉であるが, この言葉こそが Isabella の一連の隠された動機を物語るものであり, 彼女の真の性質を表しているのである。

Isabella は, “Where people are really attached, poverty itself is wealth” (119), “Of all things in the world inconstancy is my aversion.” (130) などという “empty professions” (252) を難なく言っている。Isabella の母親が彼女に “You have no disguise.” (136) と言うが, このセリフほど, “empty professions” に聞こえるものはない。Isabella の真の性格を知っているわれわれ読者は, 彼女の変装ぶりにただ驚嘆するばかりである。Isabella の変装は, 全て彼女自身の利益のためになされたものである。財産も地位もない当時の紳士階級の女性にとって, 結婚は一番楽しい飢えを免れる手段 (“pleasantest preservative from want” Austen, *Pride and Prejudice* 122-23) であるという厳しい現実があるがゆえに, Isabella はこうまでも “duplicity” (202) を使って, より有利な結婚を求めるのだろうか。

III

Isabella が “judicious affection” (153) つまり、婚約者がいても、財産のより多い男性にめぐり合えたなら、まよわずその男性を愛するという「賢明な愛情」の持ち主であると見抜いていた人物がいる。その人物は、作者 Jane Austen の代弁者であると考えられる Henry Tilney である。彼は、Isabella について次のように述べている。“... I have too good an opinion of Miss Thorpe’s prudence, to suppose that she would part with one gentleman before the other was secured” (206)

このような利己的な分別の持ち主である Isabella について、Henry は次のようにも述べている。“... Open, candid, artless, guileless, with affections strong but simple, forming no pretensions, and knowing no disguise.” (206) これは、婚約者 James の財産が期待していたより少なかったという理由で彼を棄て、財産の多い Captain Tilney を選ぶとする Isabella について語られたものであるが、ここには、先ほど述べた Isabella の性格とはまさに正反対の言葉が並んでいる。Darrel Mansell が指摘しているように、Henry はしばしば “ironic disguise” (37) を装う。従って、彼の言葉を額面通りに受け取ってはいけない場合があり、この場合もそうである。Henry は、Isabella の本来の性格の悪さを直接的表現で言明するよりも、彼女の本質とは矛盾する言葉を使うことによって、彼女の性格の悪さをさらに強調し鋭い非難の気持ちを込めることを狙っている、と推測できる。実際は、この Henry の言葉で表現された性格の持ち主は、Catherine である。この場合の Henry の “ironic disguise” の真の動機は、Isabella と比較するという形をとった Catherine への賞賛とも考えられるだろう。

Henry が、結婚と country-dance における類似性を Catherine に述べる場面がある。この場面の Henry の隠された動機を読み取ることほど難しいものはない。Henry は、Catherine と 3 回目に会った時 (2 回目に会った時は、Catherine は John との先約があったため Henry とは踊れなかった)、次のようにその類似性を述べる。

“I consider a country-dance as an emblem of marriage. Fidelity and complaisance are the principal duties of both; and those men who do not chuse to dance or marry themselves, have no business with

the partners or wives of their neighbours.” (76)

Henry の隠された真の動機とは、Catherine に愛情を示すことだったのか。それとも、ただ Catherine がダンスに集中していなかったことを、からかい気味に責めているだけなのか。それにしても、なぜ country-dance と結婚を比較するのだろうか。Austen は何を意図しようとしたのだろうか。

われわれ読者は、Henry が、この二つの類似性をまじめに誠実に語っているのか、ただ Catherine をからかうために語っているのか決めかねる。Henry がその類似性を述べることになったきっかけは、Henry と Catherine が踊りの位置についているのに、John が Catherine に話し掛け、彼女の注意が Henry からしばらくの間それたことだった。Henry は John のこんな振舞いについて、Catherine に次のように述べる。“That gentleman would have put me out of patience, had he staid with you half a minute longer.” (76) 踊りのパートナーの注意が自分から少しの間それたぐらいのことで、ここまで言うものだろうか。それは、やはり、パートナーである Catherine に対する愛情の表われと考えてもよいのではないだろうか。この場合の Henry の隠された動機とは、“ironic tenderness” (Wilt 163) を Catherine に示すことにある、と推測できる。

しかし、Henry は Catherine にただ単に自分の愛情を伝えたかっただけではないように思われる。別の動機が隠されているように思われる。Henry が、“No man is offended by another man’s admiration of the woman he loves; it is the woman only who can make it a torment.” (151) と述べていることから、男性が苦しみか否かは女性が男性に対して抱く “Fidelity and complaisance” (76) という気持ち次第であると考えていることがわかる。Henry は Catherine と出会って以来ずっと、“Catherine’s response to experience” (Wallace 22) を確立しようとしてきた。私と結婚するなら、“Fidelity and complaisance” (76) という義務は守ってもらわなければと Catherine に念を押すことが Henry のもう一つの隠された動機だったのかもしれない。

ところで、作者の代弁者である Henry に country-dance と結婚を比較させた作者 Austen の動機は何なのだろうか。Austen が、Henry に country-dance と結婚の類似性を言わせることによって、Isabella と James と Captain Tilney との今後起こるであろう三角関係の前触れを象徴していると考えられないだろうか。Henry の言う “those men who do not chuse to dance or marry

themselves” (76) とは、まさしく Captain Tilney のことである。彼は踊ることを拒否し、Catherine と踊る Henry をあからさまに嘲笑し、“woman good enough to be loved” (206) など一人もいないと言っていた。Captain Tilney は、“the partners or wives of their neighbours” (76) である婚約者 James のいる Isabella とはかわりを持ってはいけないのに、彼女に踊りを申し込むのである。そして、“... as for dancing, do not mention it I beg; that is quite out of the question.” (130) と言っていたはずの Isabella は、その申し出を承諾するのである。その後、James に対する“Fidelity and complaisance” (76) という義務を怠った Isabella は、James に婚約を破棄されることになるのである。

Catherine は、結婚と country-dance の類似性に関しては、“People that marry can never part, but must go and keep house together. People that dance, only stand opposite each other in a long room for half an hour.” (77) と言い、Henry の考え方を受け入れはしなかった。この点について、Tara Ghoshal Wallace は、“He [Henry] has shaken her [Catherine’s] confidence, but not her conviction.” (23) と述べている。作者 Austen が、Henry に Catherine の自信は揺るがされたが信念までもは揺るがされてはいないことを提示した理由は、次の二つであると思われる。一つには、Catherine は Henry に教え導かれるという立場であるが、ただ一方的に教え導かれているわけではないということ。二つ目は、Henry は作者 Austen の代弁者であると考えられてはいるが、時には作者が彼と距離を置くこともあるということである。

IV

Eleanor Tilney は、“unpretending merit” (251) の持ち主で、Catherine の親友にふさわしい人物に設定されている。Eleanor は読書好きで歴史ものやゴシック小説もよく読み、ピクチャレスクについても知識があり、父親の代わりに手紙も書くし、人を見る目にも優れている。しかし、野心的で命令的な父親 General Tilney と二人で暮らしているせいで、彼女は長年、“habitual suffering” (251) を味わっている。“patient endurance” (251) が必要である彼女の境遇は、ある意味では、ゴシック小説の女主人公の境遇と共通するものがある。Eleanor は、威圧的な父の下では、“a nominal mistress” (225) にすぎず、“my [Eleanor’s] real power is nothing.” (225) という事実を自覚している。この

ため、Eleanor は、父の意向によって Catherine が Northanger を追い出されるようにして去らなければならない時、父の Catherine に対する仕打ちがいかに非道であるか分かっていたが、不承不承父親の決定に従わざるをえなかった。家父長制のもとでは、“good sense” (56) の持ち主である Eleanor でも、不条理な父親の言動に従わざるをえないのだ。

このような男性本位の時代にあって、Austen は皮肉をこめて、“A woman especially, if she have the misfortune of knowing any thing, should conceal it as well as she can.” (111) と助言している。女性には“a well-informed mind” (110) は必要とされていないので、不幸にして博識である女性はそれができるだけ隠すべきであると忠告している。女性が博識であることを要求しないような男性支配の社会の中で女性が不利にならないように博識を隠すことは、Isabella の用いる“disguise”とはまた別の種類のものではあるが、“disguise”の一つであると言える。

女性は“disguise”を装わねばならないと提案した Austen だが、実は、Henry の“ironic disguise”と同様、Austen 自身も“ironic disguise”を装っているのである。中でも特に巧妙なものは、ピクチャレスクに関して何も知らないことを嘆いた Catherine に Henry が lecture を行う場面で語られる次のような言葉である。

... though to the larger and more trifling part of the sex [men], imbecility in females is a great enhancement of their personal charms, there is a portion of them [men] too reasonable and too well informed themselves to desire any thing more in woman than ignorance. (111)

この引用文の前半は、大多数のつまらぬ男性にとって女性の愚鈍さは個人的魅力を増すものだという先輩女性作家 (Fanny Burney) によって既に語られたありふれた文句 (“The advantages of natural folly in a beautiful girl” 111) を Austen 流に語り直しただけであるが、Austen は、後半部分で、男性の中には非常に理性的で見聞の広い人がいるが、それは少数であるということをも指摘している。そして、一見男性を賞賛しているかのようであるが、これは彼女の“ironic disguise”なのである。

Catherine はピクチャレスクについて何も知らないことを恥じるが、しかしそのせいで Henry は自分の

博識を披露できるのだから、彼女の無知はかえって彼女の魅力を増すことになる。だから Catherine はなんら自分の無知を恥じる必要はないのだと作者 Austen は断言している。裏を返せば、無知な女性に魅力を感じる男性というのは、実は、全く何も知らない無知な女性でないと、彼らは優越感や虚栄心を満たすことができないのだ、そんな彼らであってみれば、博識で理性的な男性といっても大したことはないのではないかと暗に匂わせているのである。Austen はむしろ彼ら男性のそうした愚かさを笑っているのだと解釈できないだろうか。

女性の無知を自分たちの虚栄心を満たす手段としている世の男性たちは、女性の能力を自分たちの都合の良いように次のように決めつけて、優越感に浸っている。次の引用文は、女性の能力について語る Henry の言葉である。

“Perhaps the abilities of women are neither sound nor acute—neither vigorous nor keen. Perhaps they may want observation, discernment, judgment, fire, genius, and wit.” (112)

これは Henry の “ironic disguise” であって、彼自身

の意見ではない。Henry は、前にⅢで述べたように “ironic disguise” を用いることで Isabella の本来の性格の悪さを強調したように、ここでは男性は一般的に女性の能力をこのように低く考えているということを示した。

Austen にとって “ironic disguise” という手段は、女性の能力を上記の引用文のようなものと勝手に決めつけて優越感に浸っている男性たち、または社会に対する一撃の一つの手段なのかもしれない。

引証資料

- Austen, Jane. *Northanger Abbey. The Novels of Jane Austen.* Ed. R. W. Chapman. 3rd. ed. Vol. 5. London: Oxford UP, 1988. (本論文における Jane Austen の作品からの引用はこのテキストによる)
- . *Pride and Prejudice. The Novels of Jane Austen.* Ed. R. W. Chapman. 3rd. ed. Vol. 2. London: Oxford UP, 1988.
- Mansell, Darrel. *The Novels of Jane Austen: An Interpretation.* London: Macmillan, 1973.
- Wallace, Tara ghoshal. *Jane Austen and Narrative Authority.* London: Macmillan, 1995.
- Wilt, Judith. *Ghosts of the Gothic: AUSTEN, ELIOT, & LAWRENCE.* Princeton: Princeton UP, 1980.